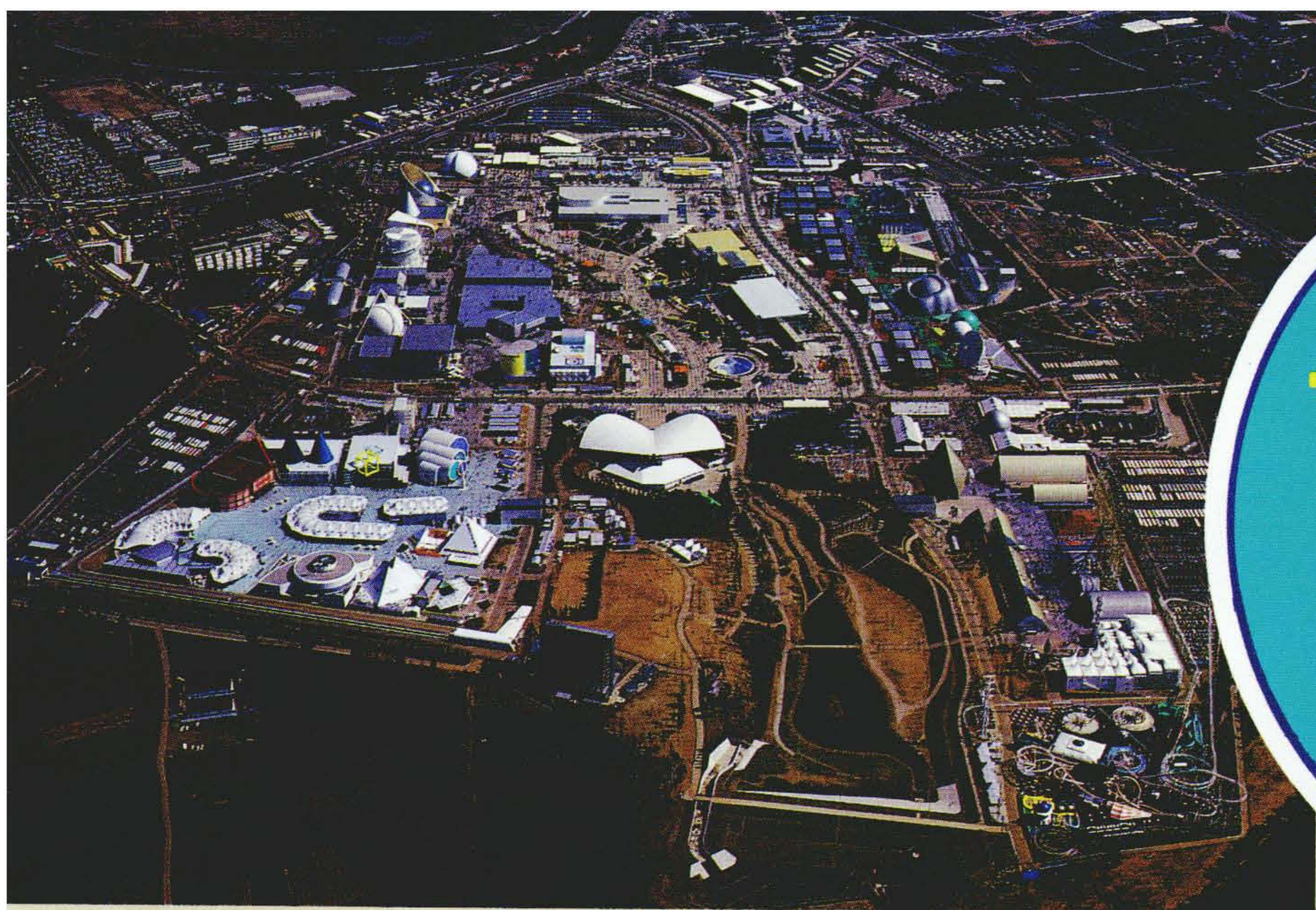




トピックス TOPICS

科学万博 —つくば'85—

科学技術分野での昭和60年の話題の一つは、同年3月17日から9月16日までの184日間にわたって、国際科学技術博覧会が開催されたことである。

茨城県・筑波学園都市の会場には、日本政府、茨城県、28民間企業、海外47箇国及び37国際機関が出展参加し、最先端技術を競い合い、期間中の総入場者数は2,033万人を記録した。

日立グループ11社共同で出展した「EXPO'85日立グループ館」も人気館の一つに数えられ、連日多数の入館者でにぎわった。

日立グループ館のテーマは、「Interface-技術との自由な対話」である。これは、数多くの先端技術を暮らしの中で、だれでも自由に使いこなせることこそ大切と、つねづね考え、技術開発に取り組んできた日立が、その成果を結集して構成した「科学の楽しさ」あふれる内容であった。

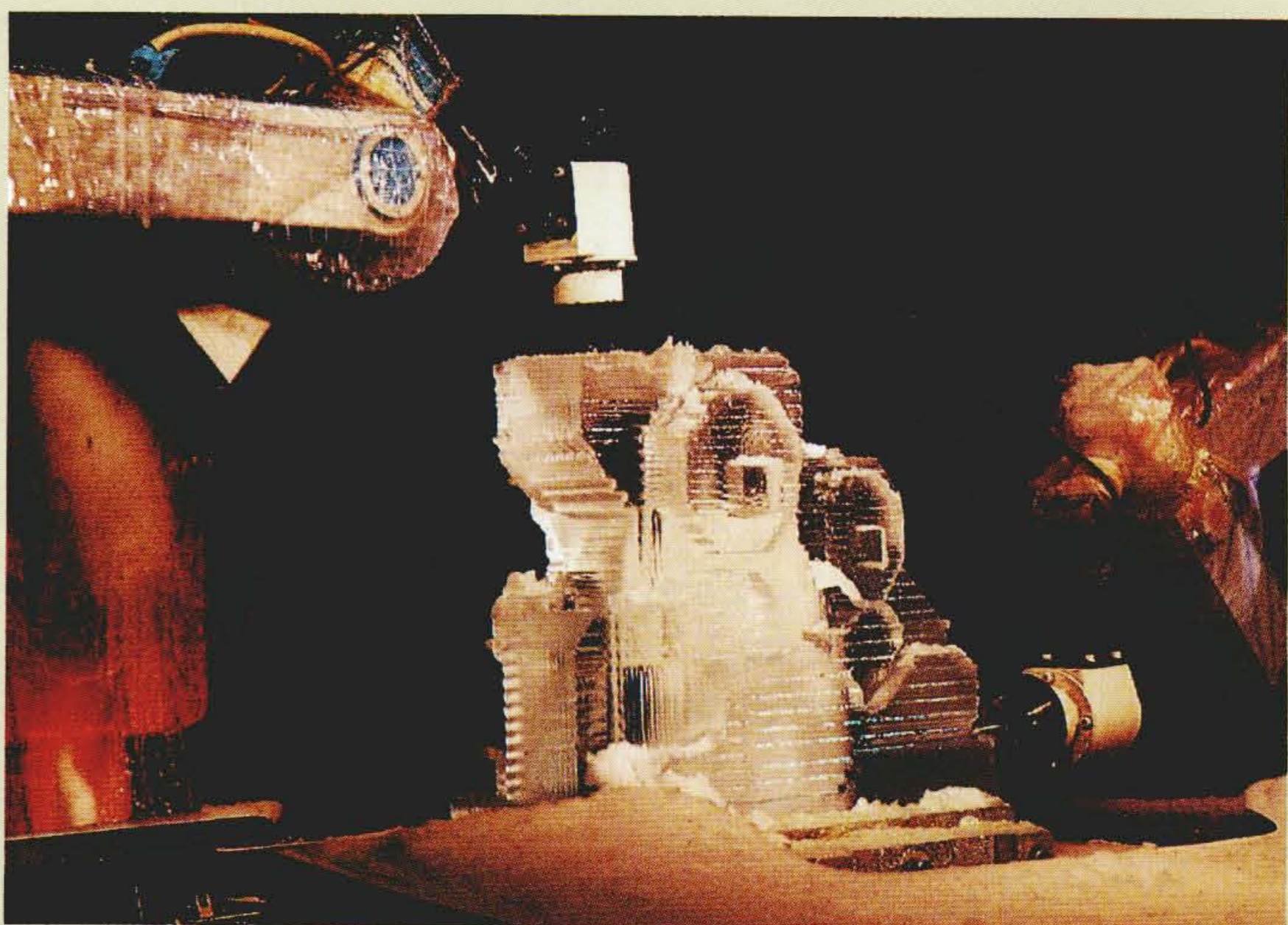
1階インターフェイス・プラザ(入場者数409万6,000人)。ロボット工芸館、電子写真館、電子情報館とあり、日立の最先端技術を駆使した展示が好評を博した。

2階インターフェイス・シアター(入場者数242万3,000人)。ここは、回転劇場形式で、観客は椅子に座ったまま四つの劇場を回ってショーを楽しむことができる。アプローチ劇場はレーザーショー。第1劇場は4体の動物ロボットと映像によるミュージカル、第2劇場はアニメーションと実写の複合映画による近未来の家庭生活、第3劇場は世界初の立体カラーコンピュータ・グラフィックスの技法による宇宙シミュレーション・トリップ、と遊びながらまさに技術とのインターフェイスを体験してもらった。

なお、政府テーマ館の植物工場、2足歩行ロボットも日立が開発、製作したものである。これらによっても先端技術に取り組む日立の姿勢を示した。



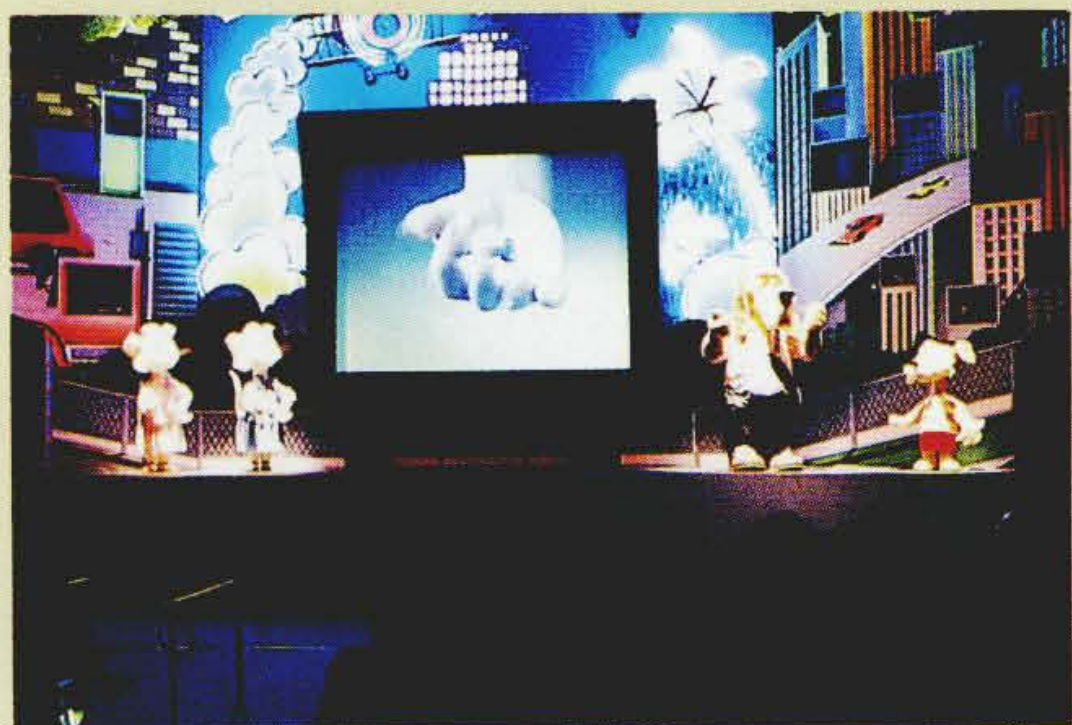
薄暮の日立グループ館。パビリオン正面に設けたピラミッド形のレーザー・タワーから発射されるレーザ光線によってレインボーカラーの光のショーを演出、来場者の目を楽しませた。



ロボット工芸館の呼び物となったロボットによる氷の彫刻。ここでは、ロボット技術のほか、お客様のリクエスト(拍手)をセンサによりキャッチし、彫刻するものを決めた。



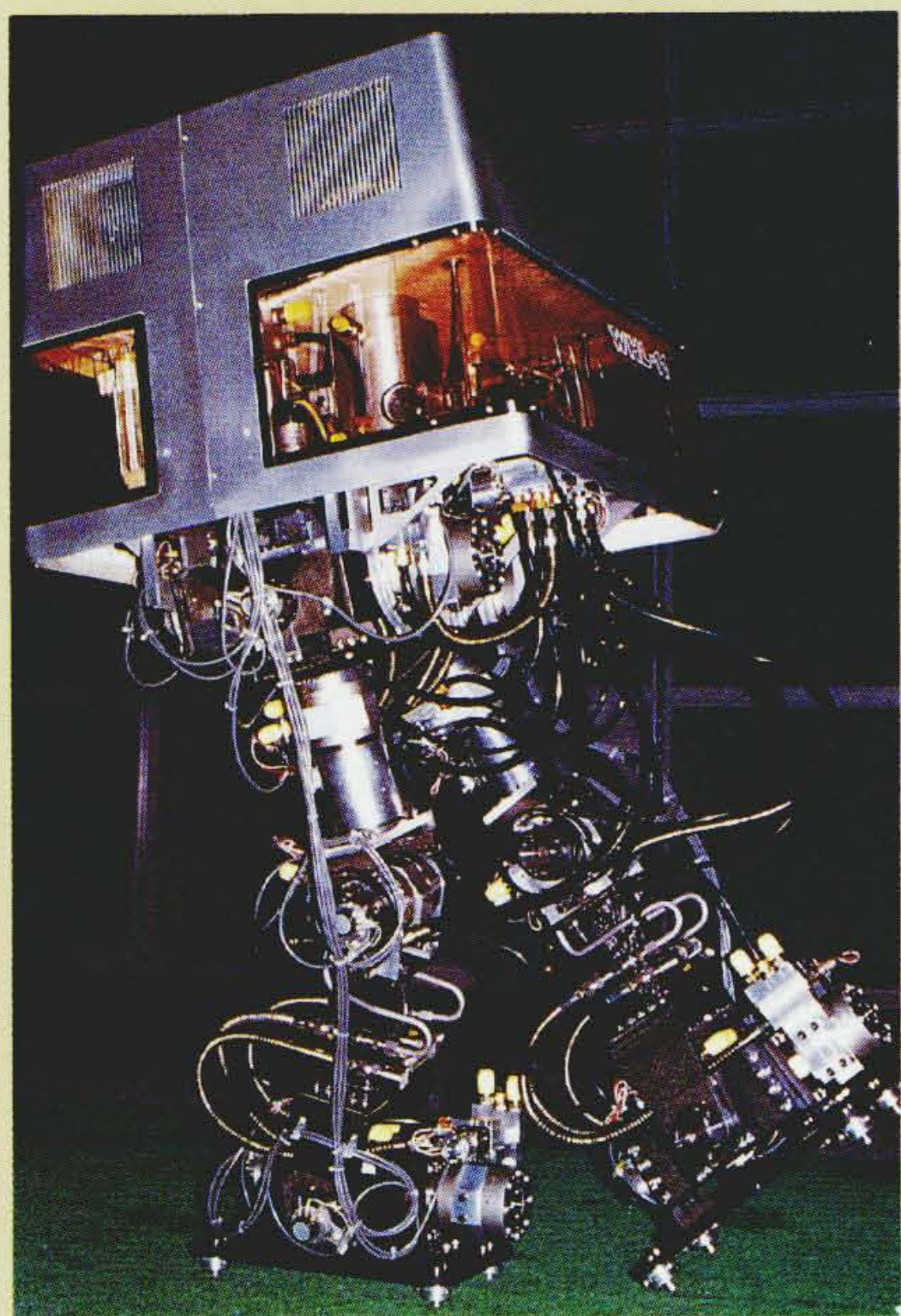
電子写真館の1シーン。9つの、映像ソフトの中からお客様に好きなものを選んでいただき、その映像とお客様の映像とを電子合成するもの。決定的瞬間を高速度・高解像度のカラープリンターでプリントアウトし、記念品として持ち帰ってもらった。



インターフェイス・シアター第1劇場の1シーン。4体の動物ロボットと映像によるミュージカルを通して、大昔からの人間と機械・道具とのかかわり合いを楽しく紹介した。



オリジナルな「読売つくば衛星新聞」を手にした電子情報館来場の子供たち。この新聞は、東京の読売新聞本社から衛星回線で電送され、館内の輪転機で印刷された。編集にはコンピュータ編集が使われている。



政府テーマ館で、演奏ロボットなどとともに人気を集めた2足歩行ロボット。早稲田大学加藤一郎教授との共同研究によって開発したもの。



政府テーマ館の一角に設けられた植物工場。日照時間、温湿度、炭酸ガス濃度、液体肥料などを最適に制御することによって、露地栽培の5～6倍の速さで野菜を栽培できることを示した。



インターフェイス・シアター第3劇場の1シーン。立体カラー・コンピュータ・グラフィック映像と立体音響で、幻想と興奮のシミュレーション・トリップを味わってもらった。

Digital Scene Simulation (SM)